

1 2	知教連 (東浦町)	○森岡小 日置 亮介 藤江小 西畑 茉夏 生路小 西川 真衣 片葩小 加藤 楽都 石浜西小 村林 雅也 緒川小 大庭 佳祐 卯ノ里小 小川 大地 東浦中 二村 健太 北部中 岡村 崇史 西部中 加藤 一誠 片葩小 乾 ゆり
	分科会番号 1 3	分科会名 能力・発達・学習と評価

主体的に学ぶことができる児童・生徒の育成

～気付きを生かし、一人一人が学習に向き合い、共有する授業を通して～

1 主題設定の理由

現在の学習指導要領では評価の観点の一つに主体的に学習に取り組む態度について示されており、児童・生徒の発達段階を考慮し、自分の学習を調整する力と粘り強く学習に取り組む力を付けさせることが教師には求められている。また、令和3年に出された『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』の答申では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」について整理されており、児童・生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。

東浦町では、令和元年度より研究主題を「主体的に学ぶことができる児童・生徒の育成」として、対話的活動やICT機器の活用といった手立てを通じて研究を進めてきた。昨年度は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることに重点を置いて研究を行った。その成果として、教師による発問や学習課題の設定によって、児童・生徒が意欲的に学習に取り組むことができた。一方で、一体的に充実した取り組みとして評価するには1時間という授業だけでは足りなかったため、単元全体を通した授業デザインを考える必要性が出てきた。また、教材への認識を深めるための手立てについては課題が残り、児童・生徒の気付きを表出させるための手立てを検証していく必要がある。

そこで、令和6年度の研究では、単元全体を通した授業デザインを通して学習と向き合う時間を確保したい。そして、その中で表出された気付きを生かして学びに向かうことで、主体的に学ぶ児童・生徒の育成を目指していきたい。本研究での「気付き」とは、事象や物事を意識して見つめることで生まれる考えのことであると捉える。

2 研究の構想

(1) 目指す児童・生徒像

主体的に学ぶことができる児童・生徒

(2) 研究の仮説

- 仮説1 単元全体を通した授業デザインを通して、学習にじっくり向き合う時間を確保し、その中で試行錯誤を繰り返すことで気付きが生まれ、それを生かして学びに向かうことで学習を自己調整し、粘り強く取り組むことができるだろう。
- 仮説2 自分が気付きを他の児童・生徒に共有し、共通点や相違点などを見付けることで、新たな視点からの気付きが表出され、学びが深まるようになるだろう。

(3) 研究の手立て

A (仮説1に対して)

- ・児童・生徒に単元の目標を明確にした単元構想を示す。
 - ・児童・生徒が自分で学びに向かう時間を十分に確保し、学習内容や学習方法を選択できるような場面を設ける。
- B（仮説2に対して）
- ・単元の途中やまとめの場面で、ICT機器や学習の成果物を活用し、一人一人の学習や気付きを共有する場を設ける。

3 研究の実践と考察

(1) 実践1 小学6年生

- ① 教科 社会 「世界の中の日本とわたしたち」
総合 「世界を知ろう」 （社会科と総合の教科横断的学習）
- ② 学年の実態

学校の実態として全校児童の約15%の児童が外国籍児童である。その中でも6年生は学年全体の約24%が外国籍児童で、その割合が多い学年である。そのため、日本語の理解に困難が伴う児童が各クラス複数人在籍している。また、基礎学力に大きな差があり、普段の学習でも児童によって理解度や意欲に差がある。

③ 具体的な手立て

ア 手立てAについて

本単元では、児童の興味関心や学習適正に応じて、資料①から自分が調べたいジャンルとまとめたい方法を児童自身に選択させた。また、最初の1時間をガイダンスの時間とし、児童に学習の見通しをもたせ、単元最後の発表直前

「せ☆か☆い」 コースについて

○自分の興味のあるジャンルを決める。

ジャンル	内容
食	世界の食文化、食生活について調べていく。
衣服	国の伝統衣装や、国の生活に適している衣服を調べたり、現代までの服装の変化を調べたりする。
観光	各国の観光地とその歴史について調べていく。
くらし	各国の法律や、国歌、国旗に関すること、祭、住居などについて調べていく。
生き物	その国にしかない生き物を探したり、その生態を調べたりする。

↓

コース名	内容
エジソン	粘土や、画用紙などを使って物を作る。
ジョブズ	タブレットを使ってスライドを作っていく。
N・T ニューヨークタイムズ	調べたものを本や新聞にまとめていく。

【資料①】 コースとその内容

せ☆か☆い 計画表

6年 組 番号

日付	やること	時間数
4/25	①全体ガイダンス	②
5/10	②せ☆か☆いウイズ ③前発表配布、計画を立てる、担任チェック ④学習スタート(基本学習)	②
5/16	⑤全体プリント①②③	①
5/22	⑥校外学習前日ガイダンス ⑦各クラスでグループ決め、発表予定を立てる	
5/29	⑧校外学習前日、前朝準備	
6/6	⑨全体プリント④⑤	②
6/13	⑩全体プリント⑥⑦⑧⑨⑩ ⑪作業帳①②	②
6/20	⑫コースプリント①② ⑬コースプリント③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫	②
6/27	⑭発表物づくり①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫	②
7/4	⑮発表物づくり①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫	②
7/5	⑯ももつあひらうまき	②
7/11	発表会	②

ジャンル 『生き物』 → コース名 『ジョブズ』
これに決めた! → スライドで好きなことに決めた!
プリント1枚、作業帳1ページ終わったら、必ず担任の先生に提出をして、次にうつりましょう! → で発表します。

【資料②】 学習計画表

までの15時間分を児童に計画させた。そうすることで、児童が学習にじっくり向き合い、試行錯誤を繰り返すことで気付きが表出するのではないかと考えた。そして、児童自身で学習を進めていくために、資料②のような学習計画を立てさせ、学習を自己調整しながら学びに向かうことができるのではないかと考えた。

イ 手立てBについて

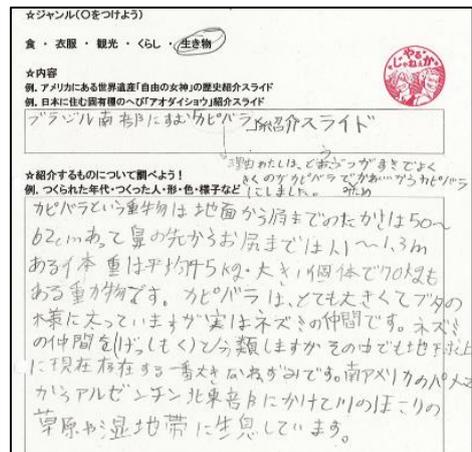
単元の最後に発表の時間を設け、児童たちが調べたものを共有する時間を確保した。他の児童の成果物と自分の成果物を見比べて、相違点や共通点を見つけ、新たな気付きが表出され、学びが深まるのではないかと考えた。

④ 授業の様子

授業が始まると、児童たちは教師の指示がなくても、静かに席に着き、それぞれの課題に取り組み始めた。直前の休憩時間までは和気藹々とした状況から一変、黙々とした雰囲気の中、自分の学習内容を確認し、それぞれが集中して課題に取り組んでいた。

調べているジャンルはそれぞれの児童で異なり、野球に興味がある児童は、「大谷翔平がいるチームの地域の観光について」や、世界遺産について深く調べたいと思う児童は「様々な

児童Bは、外国籍児童で、日本語適応指導対象ではないが、学習面では困難を伴っている。児童Bはジョブズコースを選択し、タブレットを使ってブラジル南部に生息するカピバラを紹介するスライドショーを作ろうとしていた。本時では、スライドショーの構成を考えるためにプリントを進めていた。本時の計画ではプリントができればよかったのだが、児童Bはそれに留まらず、スライド作りにも取り組むことができていた。これは、児童Bがプリントを進めていく上で、カピバラに関するついて熱心に調べ、そこで表出した気づきを早くスライドに打ち込みたいという気持ちが表れたからだと考える（資料⑧）。



【資料⑧】 児童Bの学習プリント

これらのことから、単元の時間のほとんどを児童に返したことによって、学習にじっくりと向き合うことができ、自分の気づきを生かして自己調整しながら学習に取り組むことができたのではないかと考える。

⑥ 実践1の課題

一人で学習を進めさせることにこだわりすぎてしまい、教師が学習につまずいている児童の対応に追われてしまった場面があった。教師がつまずいている児童の対応をすることも大切だが、児童同士の教え合いもあるとより学びが深まるのではないかとという反省があった。児童からはとてもよい気づきが出されているので、その気づきをその都度他の児童に広めていくための手立てを考えていく必要性が出てきた。

(2) 実践2 中学1年生

① 教科 理科 「さまざまな物質とその見分け方」

② 学級の実態

この中学校は小学校1校からの進学のため、生徒間の友人関係はできあがっており、グループごとの活動では、スムーズに実験が進められる。また、全体的に素直な児童が多い上に、一人一人の個性が周りに認められており、常に安心感がある状態で授業に臨むことができています。

③ 具体的な手立て

本単元では、グループごとでの自由進度学習に取り組むこととした。自由進度学習とは、学習内容の進め方について自分たちで計画を立てて学習に取り組む方法である。主な学習内容は資料⑨の通り、「似ている物質の見分け方」「金属の性質」「質量を手がかりにした物質の見分け方」と大きく分けて3つである。生徒たちにはその3つから好きな順番で取り組めるようにし、生徒たちが学習の計画を自分で立て、学習を自己調整しながら進められるようにした。

ア 手立てAについて

生徒が自分たちで学習を進める上で、単元の目標を明確にした学習の手引き（単元構想）を示し、学習の見通しをもたせた。その上で授業時間の9割程度を生徒主体で進め、生徒たち自身が学習にじっくり向き合い試行錯誤しながら課題を解決できるようにした。

イ 手立てBについて

単元の最後にそれぞれのグループの学びを発表する場を設けた。ここでは、3つの学習

1年生自由進度学習		
学習の手引き（標準時間：7時間）		
理科「さまざまな物質とその見分け方」教科書P92～P96		
【目標】		
<ul style="list-style-type: none"> ○身の周りの物質の性質に着目し、物質の固有の性質と共有の性質についての基本的な概念や原理・法則などを理解する。 ○身の周りの物質について、見通しをもって観察、実験などを行い、物質の固有の性質と共有の性質などにおける規則性を見つける。 ○実験などに関する基本操作や記録などの基本的な技能を身に付ける。 		
【学習の流れ】		
	内容	時間数
1回目	※全員必ず行う。 実験器具の使い方（ガラスびんなど）	①
2回目 3回目 4回目 5回目 6回目 7回目 8回目	似ている物質の見分け方	①
	まとめと小テスト	①
	金属の性質	①
	まとめと小テスト	①
	質量を手がかりにした物質の見分け方	①
	まとめと小テスト	①
8回目	まとめの発表	①
※各実験とまとめと小テストは、必ずセットで行う。		

【資料⑨】 学習の手引き

内容について学んだことを情報共有アプリにまとめることで、自分たちの考えを整理するとともに、全体で共有しやすいようにした。また、発表会を開くことで、他のグループから自分たちのグループにはなかった、新たな気付きが生まれてくるのではないかと考えた。

④ 授業の様子

授業開始から5分間は教師から各グループの学習内容と安全上の注意事項について、全体で確認を行った。その間、ある程度の学習内容を把握していた生徒たちはそわそわしており、すぐに学習に取り組みたいという気持ちが強く伝わってきた。その後、生徒たちは、班ごとに学習内容を確認し、それぞれの学習を始めた。授業の観察に行った際は、全5グループある内の4グループが「金属の性質」で、1グループが、「質量を手がかりにした物質の見分け方」を選択し、それぞれの課題に取り組んでいた。

「金属の性質」に取り組む生徒たちは、グループのメンバーと一緒に話し合い、実験の手順を確認しながら学習を進めていた。その中で、教師から与えられた学習課題に取り組むだけでなく、「金属は何個並べても電流は流れるのか」「磁石に金属はどれだけつながるか」など、学習を進めていく中で気になったことを追究する姿があった。そして、「意外と普通に電流って流れるよ」や「思ったより金属ってつながられるんだ」など、様々な気付きが表出されていた（資料⑩）。

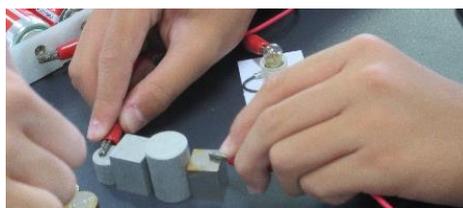
「質量を手がかりにした物質の見分け方」に取り組む生徒たちは、ガスバーナーを使う実験であったため、安全を考慮し、教師立ち合いのもとに実験を行っていた。そのため、危険な行為だと感じる場面もなく、生徒は自分たちで立てた計画に従って学習を進めることができた。また、熱した物体から「めっちゃいいにおいがする」という気付きを表出させ、次に学習する「気体の性質」への意欲につなげていた（資料⑪）。

単元最後の授業では、それぞれのグループで話し合いながら、実験結果をまとめたプリントを見直し、情報共有アプリにまとめていた。しかし、その中には様々な気付きをまとめている姿が少なく、教科書通りの内容をまとめているグループがほとんどだった。

授業の後半では、グループごとにまとめたものを発表していた。中には、他のグループの発表を聞きながら自分がまとめたものを修正する生徒もおり、自分と他の生徒の学びの共通点や相違点を探しながら聞いている生徒の姿が見られた（資料⑫）。

⑤ 実践2の成果（生徒C、生徒Dの学びの様子から）

生徒Cは、積極的に班でまとめた意見の発表を行うなど、行動力やリーダー性はある一方で、自ら挙手して発言することは少なく、特別理科に対する熱意を持っているわけではない生徒である。生徒Cは本単元において、班の中で率先して動き、個別に班員に実験内容を共有する場面が見られた。また、自分たちの班だけで解決できなかったところは、他班の様子を見に行き、そこから得られた結果を班員同士で共有することができた。普段の授業では、挙手することが少なく、理科に対して熱意を感じられにくい生徒Cだが、授業時間の多くを生徒に委ねたことによって、生徒Cのよさである、行動力やリーダー性が引き出され、学習



【資料⑩】 金属に電流を流す生徒



【資料⑪】 教師と一緒にガスバーナーを使った実験をする生徒



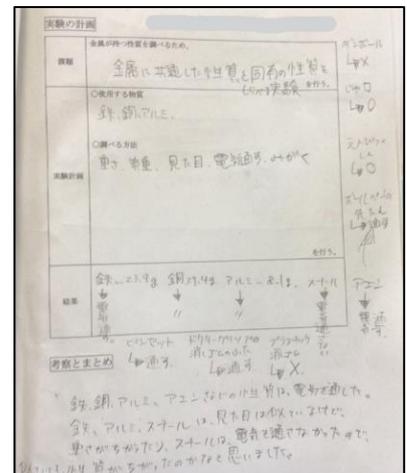
【資料⑫】 まとめを発表する生徒

の中でそのよさを引き出すことができた。単元最後の振り返りには、「何かを自分でやる力、友達と協力する力が伸びたと思う」と記述しており、本人自身が主体的に学ぶ力が高まっていることを実感していることが分かった（資料⑬）。

自由進度学習で、何かを自分でやる力、友達と協力する力が伸びたと思います。

【資料⑬】生徒Cの振り返り

生徒Dは、目的をもって学習に取り組むことが少ないため集中力が続かないことが多い上に、日常での理科の経験が不足しており、理解が不十分な場面が目立つ生徒である。しかし、本単元での生徒Dは、集中力が途切れることなく、積極的に実験に参加していた。その証拠として、段ボールや水道の蛇口にも電気を通して実験しており、その結果を欄外にメモしていた。そして、これらを基に考察を記述していた（資料⑭）。また、単元最後の振り返りには「似ている見た目の物でも、結果が違ったりと、意外なことばかりだった」と記述しており、生徒Dにとって今回の学習は、自分の気付きを生かした学習ができていたと考えられる（資料⑮）。



【資料⑭】生徒Dの実験記

• 三つの実験を通して、その物質と物質の性質で反応して結果が変わったり、似ている見た目の物でも、結果が違ったりと、意外なことばかりでした。

これらのことから、生徒たちからは様々な気付きが表出され、それを生かして考察していたり、他の生徒の気付きから自分の学習を修正したりしようとする姿から、学習に粘り強く取り組みながら学びを深めていることができていたと考えられる。

【資料⑮】生徒Dの振り返り

⑥ 実践2の課題

生徒たちが様々な活動をする中で、教師が生徒の学ぶ姿を捉えられず、気付きを広めることができなかった。原因としては、安全管理や基礎的な知識・技能を身に付けさせることに手一杯になってしまったことが挙げられる。生徒たちが主体的に学びを進める分、教師として何を大切にするのかを明確にする必要があることが分かった。

4 研究の成果と課題

① 研究の成果

2つの授業実践から、単元全体を通した授業デザインによって多くの児童・生徒が学習に向き合う時間を十分に確保することができた。これによって、児童・生徒からは多くの気付きを表出させることができた。それを生かして、自分の気付きを全体で共有する機会を設けることで、他の児童・生徒に広げることができ、学びを深めていくことにつながった。これは、児童・生徒が主体的に学びを進めた結果であると考えられる。そして、自分たちで学習を自己調整しながら取り組んでいく姿から、児童・生徒たちは我々教師が思っている以上に有能な学び手であることに気付かされた。

② 研究の課題

児童・生徒一人一人が学びに向かう力は想像以上であったが、その学びを支えるための教師の役割が不明確となってしまった。その授業で身に付けさせなければならない力は何かを教師自身が吟味していく必要があるように感じた。また、学びを深めていくためには一斉授業からの脱却と児童・生徒一人一人の学びの観察が必須であることも感じられた。児童・生徒一人一人は有能な学び手であることを前提に、学びを支える教師の在り方について今後も実践を重ねて吟味していきたい。